



アーキテクトン
米田 明

TEMPLUM AD EXISTENTIA

1959年 兵庫県生まれ
1981年 東京大学工学部建築学科卒業
第5回学生設計優秀作品展
同大学院修士課程修了
～89年 竹中工務店設計部
ハーバード大学大学院デザイン学部建築学修士課程修了
その後、アーキテクトンを設立。
2004年 「BLOC」 吉岡賞
「HP」 グッドデザイン賞
日本建築学会作品選集に選ばれる。
現在、京都工芸繊維大学大学院助教授を務める。



俯瞰図

Q：大学時代はどんなことを主にしていましたか？

A：大学に入って、4年間空手をやっていたので、あまり学校には行かなかったですね。授業は程々に空手ばかりやっていました。今で言う、「引きこもり」みたいな感じかも。まあ、体を動かしていたからちょっと違うとは思いますが（笑）

時代的にも修行じゃないけど、修練みたいな感じでどっぷりやってました。それが卒業設計の題材にはなっているんで、直接的な背景にはなっていますね。

Q：では、卒業設計の作品や考え方は空手から影響を受けたのですか？

A：体力的にはそうかもしれませんが（笑）
感覚的にはどんどん社会が多様化してきて色んなニュアンスが出てきている中で、昔はもっと白黒はっきりしていた話が細分化されて社会が変わろうとしてきていた。建築で言うポストモダンが出てきていて、反動化していた時代であったのは学生レベルでは感じていました。

Q：作品の「核」となるものはその背景が大きいですか？

A：情報がいっぱいある中でどうするかというより、まあ自分の中でわかる範囲をとっかかりとして、自分の感覚くらいは信じてやろうという感じはありました。

とりあえず外の話は置いて、というのは学生の4年間はあります。

Q：当時建築ではどんなことに興味がありましたか？

A：安藤忠雄さんですかね。地元が関西なので、安藤さんの作品に接する機会は多かったんで、あのコンクリート打ちっぱなしは影響を受けました。当時の印象だと目新しいものだったし、あれがひとつの時代の反転するようなモーメントだったりするわけで、あれからみんなスタートしていったところはあるかもしれないですね。

Q：学生時代に書かれた作品コンセプトを読むと、これからの自分への意気込みのように感じたのですが、何を目標として卒業設計に取り組んだのですか？

A：引きこもりの集大成だけど、それじゃあダメだろうみたいな（笑）

他の人は外部の状況に対しての提案が多いけど、僕のは外部コンテンツはないんだよね。学生の水準で今まで学んできたことをそのまま出してもあまり意味がなくて、どちらかというと、「自分のやっている事や興味のあるものをどう建築と関わらせていくかというのを考える原点としての過程」に、卒業設計はなるのではと思います。

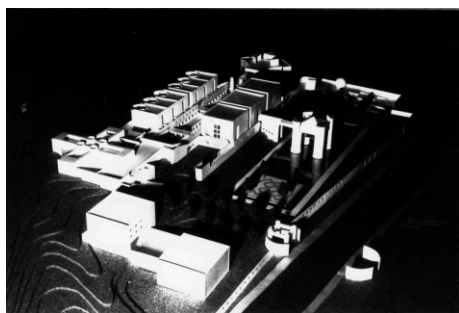
4年間では、やはりそこまで多くを学べるわけではないので、自分が考えてたことが定着されるというか、そういったことに重点を置いた方が良いのかなとは思っています。

「時代は変わっても自分にとっては変わらないもの」ではあるよね。あまり外部のことを語ってしまうと、外部は流動的なものだからその時はそういう風に考えてた、で終わってしまうけど、内部のことは自分と連動しているよね。

だから、目標ということ言うと、少なくとも4年間やったことと建築との関係性を考えてやったということになるかな。

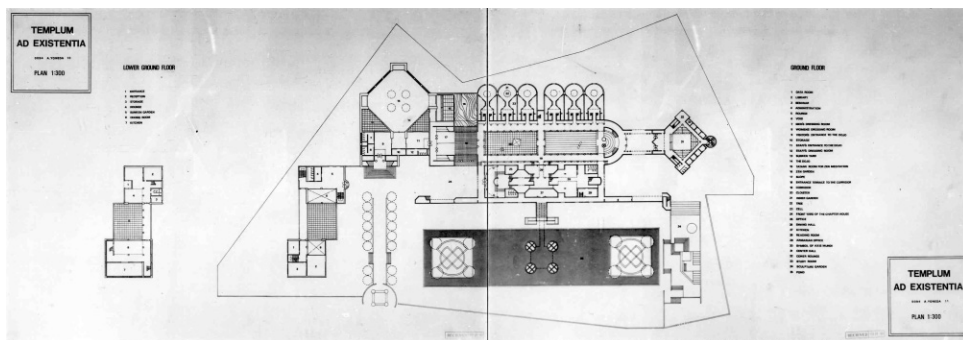
「コミュニケーションを取る能力」とか、プレゼンテーションの仕方であったり。また、さっきの話のように「何を題材としてるか」というのもあるし、「建築的にどう構成しているか」という3つくらいはあるんじゃないかと。

題材とするもののオリジナリティをいかに自分らしく建築に落とし込めるか。だから、ちょっと図面が汚くても「構え」というか、どうしたいかが伝わる



模型写真

評価できると言えるのかもしれないですね。まあ、でも建築というものはやはり評価をするのは難しいとは思いますが。けれど一つ上での評価軸があるというのはいいことだと思います。そういった選択肢もあって良いかなと。そうやって切磋琢磨していくのが日本の建築界の現状だったり。



平面図

Q：卒業設計の作品と今の作品との関係性についてはどうですか？

A：あるといえばあるけど、イメージ的なものではないかな。「構え」としてはそういうものはあるけど、最終的なプロダクトとして関係するという意味ではあまりないかもしれません。

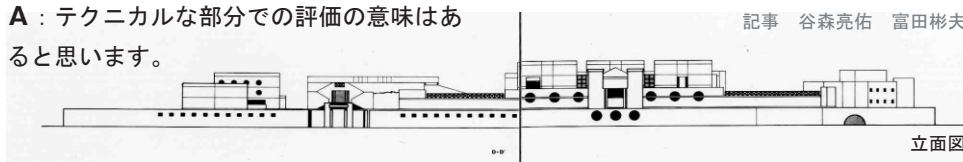
Q：卒業設計作品を「評価する」ことについてどのように思いますか？

A：テクニカルな部分での評価の意味はあると思います。

海外では考えられないからね。ただ、これで終わりというわけじゃなくて、その先がまた何年もあるわけだし、持続的にしていけないといけなないね。

Q：最後に、米田先生にとって卒業設計とは？

A：そうですね・・・
「誇らしくもあり恥ずかしくもあるもの」かな。



立面図

記事 谷森亮佑 富田彬夫